

お便り

POST

◇前号「本棚」の筆者から◇

上野で長谷川等伯「松林図屏風」が公開され、その前に立つ機会を得ました。

流れる霧の向こうにあるいは濃く、あるいはほのかに松林が見え隠れしています。踏み込めばたちまち霧に包まれます。霧が流れているのか、見えていた木がふと隠れてしまうのです。等伯は場所による霧の濃淡とともに時間の流れさえ描き込もうとしたようです。

ふと形の似た木が重なって見えてきました。前方にギザギザの葉を茂らせた木がくっきりと、後方にはぼうっとよく似た木が寄り添っています。別の木か、それとも霧の流れに応じて姿を見え隠れさせる一本の木を二度にわたって描き込んだのか。まるで木が振動しているようです。そうなると激しく走る筆によるあの葉も、等伯が運動そのものを表現しようとしたものに見えてきます。

やがて微細な揺れが画面にもたらず振動が、こちらの身体にも伝わってきました。絵に「共感」したというとは違う。あえて言えば「共振」したところでしょうか。身体の深いところで屏風とともに小さくふるえる自分を感じたのです。

数日後、AKB48の楽曲に乗って踊る少女の映像を見ました。ダウン症の彼女は一見ゆっくりと、マイペースで身体を動かしています。けれどその身体の中では小さく、かつ速度を伴って激しく「共振」が起きているのを感じずにはいられませんでした。

身体の中で起こる変化に、私たちは敏感でいるでしょうか。前号で『ヘレン・ケラー自伝』をめぐる保育者の身体を「随っていく身体」と表現しました。それは子どもの考えや行動を尊重するというだけでなく、子どもの中で生起している変化に「共振」する身体にほかならないのです。(佐治 恵)

絵本の紹介

『せかいでいちばんつよい国』

デビッド・マッキー作／なかがわ ちひろ訳

光村教育図書 2005年

余計な解説はいらない気がするので、以下あらすじのみ。大きな国の大統領が、「世界中の人々を幸せにするために」世界中を征服しようとする。自分たちになることが、世界中の誰にとってもよいことだと信じているのである。次々と他の国と戦って征服し、最後に、あまりにも小さいのでほうっておいた国に、征服しないで残しておくのも気持ちが悪いので、戦いにいく。ところがその小さな国には軍隊がない上に、大きな国の兵隊たちをお客様のように歓迎した。もてなされて、することもない兵隊たちは、小さな国の人々の仕事を手伝うようになり、大統領はたるんだ兵隊たちに腹をたて、母国へ送り返し、別の兵隊たちを呼び寄せるが同じことの繰り返し。とうとう見張りを何人が残して国へ帰ると、母国の様子が今までと違う。兵隊たちは小さな国の料理を作ったり、遊びをしたり、服を着て楽しそうにしている。大統領は、「どれもこれも戦争で敵からぶんどってきたものだから」と自分を納得させる。その晩、大統領が息子に歌を請われて歌った歌はどれも、その小さな国の歌だった。(KT)

お茶大子ども学ブックレットの紹介

お茶の水女子大学 ECCELL 企画のシンポジウム、フォーラム、特別講義などを記録した冊子の4冊目。Vol.4 第6回お茶大 ECCELL 子ども学シンポジウム これからを生きる子どもたちへ～津守眞氏からのメッセージ～【話し手：津守眞（お茶の水女子大学名誉教授）、聴き手：高橋洋代（立教女学院短期大学名誉教授）】

実費（500円＋送料）にてお付けします。ご希望の方は、ECCELL事務局 nyuoyji-info@cc.ocha.ac.jp までお問い合わせください。